



「未見の我」を求めて ～入学式での校長先生の式辞を受けて～

入学式で、校長先生が新入生に向かって、「未見の我」という話題で式辞を述べられました。

「未見の我」とは、まだ自分でもわからない自分。未知の可能性を秘めた潜在能力豊かな自分ということです。とかく自分自身の能力を限定しがちなとき、可能性を求めたいというわけです。

校長先生は、自分が求めている以上のことは結果的にも獲得できない、とも言われました。

さて、東北大学の元総長の西澤純一氏は、「未見の我」という題で講演されたとき、自身の生き方を振り返り、次のように述べられています。氏は半導体・レーザー・受光素子等の開拓者。

「子どもの頃、学習成績が芳しくなかった私は、中学生の時、当時の県知事の話聞いて感銘を受けました。話は、『人間には、身体はどこかに優れたものがあり、長い間に努力した人だけが自分の才能に花を咲かせられる。だから、自分に才能がないとあきらめている人がいたら、それは大きな間違いだ。』と。

私は、大学の卒業当時、学会の発表でさんざんに言われ落ち込んだことがあります。そのころ思い出したのが、この県知事の話だったのです。まだ、自分には、花が咲いていないが、自分にはきっと『いいところ』があるはず。もう少し努力してみよう、と一生懸命に頑張ったのです。そういうことを続けていけば、間違いなくすばらしい才能が育つということ、みなさんがたには忘れないでいてほしいと考えています。」

また、氏は「潜在的な力は、競争原理によってのみにもとづいた行動では引き出せない。自分の可能性を信じて、極限まで努力することからしか、引き出せない。」という意味のことも述べられています。

さて、未知の領域ということであると、ジョ・ハリの窓という深層心理学の言葉があります。自己と未知の領域の関係について説明しています。(ジョ・ハリはジョセフ・ルフトとハリー・インガムという2人の心理学者の名前を合わせたもの。)

【ジョ・ハリの窓】

◇Ⅳ「未知の窓」とは、

「誰からもまだ知られていない潜在的な力を秘めた自分」ということです。

◆Ⅰ・Ⅱ・Ⅲによる自己開示をしながら、なおかつ人間にはまだまだ未知数の部分があり、無限の可能性を開拓できるということですね。

他人に
わかっている

他人に
わかっている

自分にわかっている 自分にもわかっている

I 開放の窓	II 盲点の窓
III 秘密の窓	IV 未知の窓

◇就職希望先へ提出する調査書・進学推薦で提出する調査書の成績は、1学期末の仮評定が使われます。1学期が勝負と心得て、この1学期間、しっかりと努力していきましょう！